

『平家物語』横笛と滝口入道との贈答歌について

佐藤 茂樹

『平家物語』の傍系説話の一つに「横笛」の章段がある。横笛説話について、神野藤昭夫氏は、内容上、三種(①横笛の死には言及しないもの、②出家タイプ、③入水タイプ)に分類された⁽¹⁾。また、読み本系と語り本系とは、名称が異なるなど、『平家物語』研究において注目すべき章段である。『平家物語』研究者ではない私の研究対象とはならないのであるが、この「横笛」には、横笛と滝口が交した贈答歌が、「延慶本」と「覚一本」とでは、作者が入れ替わっているという面白い現象がある。作者が入れ替わっても、歌の意味が通じるのである。

ここに、和歌を研究してきた私の興味を惹く。『平家物語』としての研究は不可能であるが、純粹に二首の和歌の意味を考え、なぜ「覚一本」作者は、詠作者を入れ替えたのかを考えたい。「延慶本」は「古態性」を残すと単純には言えないのであり、この「横笛」においても、場面によっては「延慶本」の加筆を指摘する研究がある⁽²⁾。ただ、この贈答歌に関しては「延慶本」にこそ古態を残していると思われる。「延慶本」の贈答歌の場面に

は、二人の素朴で現実的な生々しい感情が見え、原態的な姿を残していると思われるのである。平家研究において、「覚一本」は「延慶本」を意図的に改変したとしてその意図はといった問題提起は愚かなことであるのかもしれないが、異なる状況下における同一贈答歌をいかに考えるかは、一考の価値があるのではないかと思う。そこで、本稿ではまず、「延慶本」を対象として考察し、次に「覚一本」を中心に据え、「延慶本」との比較を行い、贈答歌の問題を考察する。

—

『延慶本』では、「時頼入道々念由来事付永観律師事」と題されている。書き出しは「抑も滝口が道念の由緒を尋ぬれば、女故とぞ聞こへし」とある。滝口の出家は、横笛との結婚を父に反対されたのが直接の原因である。それを「女故」とするのは、横笛の身分が高ければということを含んでいるにしろ、横笛に

とつては酷いことである。女性への厳しい姿勢が見える。³⁾

横笛との結婚に対して、父茂頼は「様々に諫めけれども」とある。滝口は、人生、長くても七、八十年、元気な時は二十年を超えることはない。そんな人生に経済的に豊かであっても「悪からむ女に相ひ具しては何かはせむ」と考えている。好きな女性と結婚してこそその人生であるというのである。しかし、横笛との結婚は「親の諫めを背かば、不孝の罪業遁れ難し」となる。また、親不孝を免れ、父の諫めに従えば、「女を捨てむとすれば、神に係けて契りし昵言も皆許りと成りぬべし」と、横笛を捨てることになり、神を裏切ることになる。どうにも生きる道はない。そこで、考えたのが、「傾城の色に相はざらむには如かじ」とし、「身を山林の間に宿し、命を仏陀に仕へ奉りて」として、女性を避け、出家の道を選ぶことであった。出家にしか生きる道はなかった。滝口はこの世の名残を惜しむとばかりに、主家の小松家に最後の出仕をし、夜は横笛と最後の逢瀬をする。「行く末来し方の事共思ひ連けて、そぞろに涙ぐみければ、横笛危しみて」という状態である。出家を前にして、この世の名残は尽きない。しかし、翌朝、敢然と出家のため嵯峨へ赴く。滝口の出家を、若さと「都よりも定めて御とがめ候ひぬ」を理由に、聖は応じない。ならばと、滝口は「自ら本鳥を押し切りければ、聖人力及ばずして、髪をそり戒を持たせけり」として、出家への願いを叶えた。

小松家の人々にも、結婚を約していた横笛にも出家のことは伝えなかった。それは、聖人の対応にも見られるように、反対されるからであろう。特に、結婚を約していた横笛に対しては非情とも思える行動であるが、それは、出家への強固な意志があったからである。出家前夜の横笛との逢瀬での感傷性は振り捨てたのである。そうでなければ、「二十五歳〔覚一本〕では一八歳」という若い年齢での出家は果たせなかった。ただし、出家後の生活では、思わず「世を厭ひ浄土を傾ふ墨染の有繋がにぬるる袖の上哉」という古歌を口ずさむ。強い意志をもって出家したものの若い年齢では、修行に耐えきれず俗世への未練がよみがえり、仏者ではなく、人としての本音が漏れたものと思われる。その古歌を、滝口の出家を聞かされ、「泣く泣く彼こへ尋ね行き、偶然耳にした横笛は、「恨敷や早晩か忘れむ涙河袖のしがらみ朽ちははつとも」の返歌を送る。形としては、贈答歌であるが、内容的には贈答歌の体をなしていない。横笛は滝口がふと漏らした古歌に応じるのではなく、自分の来訪を伝えること、「恨めしい」という自身の感情を訴えることが専らである。名波弘彰氏は、「なんともすさまじい恨みの歌であろうか」として、「何日も空闊をかこち続けて、いま愛する男に逢った。その瞬間愛欲に身を苛まれる閨怨の思い（恨み）がはけ口を得て相手の男に向ってはき出された」と解されている⁴⁾。贈答歌における返歌のルール、贈歌への反論・反駁・切り返しはない。横笛

は、滝口から出家の思いを知らされることもなかったので、「絶えぬる夜半を恨みて、『何なる瀧川にも身を投げばや』と思ひける」という状態であった。突然訪問がなくなったことに、思い当たる節はなく、捨てられたと思っていたのである。

再び滝口に巡り会えた感動を次のように伝える。

今まで御出家を知らせせ給はぬ事の心憂さよ。如何なる

時、虎臥す野辺へも、蓬が柚までも、おくれじと契り給ひしぞかし。いつの間に替りける御心ぞや。昔の好み忘れ難くて、是まで尋ね参りたり。縦ひ一字のすまひこそ叶はねども、谷をも隔て峯をも連ねて、互ひに善縁とも成り、一つ蓮の身とも成らむ。

出家を知らせなかったことの恨みを述べ、自分の訪問を伝えており、先ほどの歌の内容とも一致しており、感情の流露が感じられる生き生きとした描写である。しかし、こうした場面に、自らの出家をも語っている点は注目される。横笛の思いのたけを語っている中に出家への決意と来世へのめぐり逢いを語っているのである。衝動的にも見える横笛の出家であるが、横笛の心中では覚悟のことであった。

一方、滝口は、「破り無く思ひし」横笛の予期せぬ訪問と対面の懇願に対して、

胸騒ぎ、書き暮らす心地して、馳り出で、見ばやと思へども、「さては仏に成りなむや。生死の紀綱にこそ」と心強く思ひて、弥よ返事もせざりけり。

と、心動き、会いたいとも思うが、修行のためにと「心強く」沈黙を守る。それに対して、横笛は、

「是まで尋ね奉りたる甲斐も無く、うたてくも閉ぢ籠り給へる御心づよさかな。人はげにさも無かりける物故に、吾が身一つにかきくれて、思ふ心も何計り、女の身程に心憂き物はなし。今生の対面せむも今計り、責めては御音計りも聞かせさせ給へ」

と、今生の最後の対面だから、せめて声だけでも聞かせて欲しいと、しおらしくあるが、執拗に強い対面への思いを表している。

それに対して、滝口は初めて口を開き、

「誰故にかかる道にも思ひ入るぞとよ。今世の対面有るべからず。契り有らば、一蓮の上にと祈り給へ」と計りにて、出で合ふ事ぞ無かりける。

と語る。滝口は、今もなお愛しているであろう横笛に対して、「誰故にかかる道にも思ひ入るぞとよ」と言う。この部分を、山下宏明氏は「そなたへの思いを断ち切るために出家したのだ」と解釈される。滝口は、好き好んで出家したわけではない。耐えて辛い修行をしている。その生活を乱すかのような横笛の来訪は、滝口にとっては、嬉しくもなければ、邪魔なだけだっただろう。迷惑の上なかつたのである。もういい加減にして欲しいという思いが、こうした言葉になったものと思う。ただ、横笛にとつては、この言葉は、「今世の対面あるべからず」という強い拒絶よりも衝撃的であつただろう。自分のせいで滝口は出家したというのは、横笛にとつては、自分が何をしたのか、自分の何が原因なのか分からなかつただろうが、自分のせいで滝口が出家したという事実は、彼女に重くのしかかつた。

最後の願いも通じず、横笛の絶望感は深い。滝口の「契り有らば、一蓮の上にと祈り給へ」に応じたのであろうが、出家への覚悟は先ほど見たように横笛にとっては織り込み済みのことであつた。ただ、この場でとまでは思つてはいなかつただろうと思われる。恨みの思いを抱いたままの衝動的な出家を果たす。

恨みの涙せきあへず、押さふる袖も露けて、自ら髪を押し切りて、庵室の窓に投げ懸くとて、

と言つて詠んだのが問題の和歌である。愛する滝口であるが、対面を完全に拒否され、滝口を強く恨む気持ちが表現されている。滝口への恨みが、なぜ、出家につながるのだろうか。しかも、この場においてである。それは、滝口の「誰故にかかる道にも思ひ入るぞとよ」に、横笛は衝撃を受けたからであつた。滝口の出家は、突然のことであり、理由も含めて事情を呑み込めていない。そんな中、滝口から、自分の出家の原因は横笛にあると言われ、横笛は衝撃を受けたことであろう。出家の原因が自分にあると言われても、思い当たることはない。そうなら、自分も滝口のせいで出家するという、ある種、腹いせの出家ではなかつただろうか。そうして、詠じたのがこの歌である。

剃るまでは浦見し物をあづさ弓誠の道にいるぞうれしき

この流れの中で、この和歌を横笛が詠んだとすれば、剃つたのは横笛であり、恨んでいたのは、横笛が滝口を恨んでいたのである。そして、「誠の道に入る」出家が出来たことを喜んでいゝ。横笛が「誠の道にいる」とはいつでも正式に出家したわけではない。滝口の場合も、「聖人」が出家に同意しないため、自ら「本鳥を押し切り」、その後、「聖人力及ばずして、髪をそり戒を持たせけり。生年廿五にして本鳥を切り出家」とある。横笛もこの後、髪を剃り、戒を受けて出家したと予想される。で

は、恨んでの出家であるにも関わらず、何故、横笛は出家したことを喜ぶ表現をしたのだろうか。出家への念願が叶ったことであれば、喜びの表現は理解出来る。しかし、そうではない。怒りにまかせた衝動的な腹いせの意味合いの強い出家である。

この言葉には実感が籠っていないと言える。その真意は、滝口からお前のせいで出家することになったと言われ、私に責任があるなら私も出家する。あなたは出家し、私の対面の願ひも聞き入れず、強い道心をもって拒絶し、さぞかし満足している。ことでしよう。私もこれからは、非人情を貫き歎くことはなく、強い道心をもって、あなたのように生きることが出来ることを喜ぶといった、強気で皮肉な鬱憤を晴らすものではなかったかと思われる。平安女性には珍しい気性の激しさが見える。この贈歌に対する滝口の返歌は次の和歌である。

そるとてもなにかうらみむあづさ弓引き留むべき心ならねば

「そる」「うらむ」「あづさ弓」が対応しており、形式的には贈答歌である。贈答歌の体をなしているが、誰が「そる」のか、誰を「うらむ」のかは、明快とは言い難い。この滝口歌を山下宏明氏は、横笛歌に「まともに応じる」として、次のように解釈される（前掲論文）

あなたが剃ったと言ってもわたしは何とも思わない、あなたが決断したことなので

剃ったのは横笛であり、横笛歌の内容と合致する。ただ、横笛歌では、恨むのは横笛が滝口を恨むという内容であったのに対し、滝口歌では、滝口が横笛を恨むとなって主客が逆転するように解釈されている。「あなたが決断したことだから、あなたの出家をわたしは何とも思わない」というのは、滝口の最後の言葉「今世の対面あるべからず」に通じる冷淡な内容であるが、ただ、この非情さは、強固な信仰心からあって、横笛を嫌っているからではない。むしろ、仏者として横笛を愛してはいけないが、今もなお心の奥底では横笛を愛しているのである。横笛の来訪を知った時の、滝口の「胸騒ぎ、書き暮らす心地して」が表している。「何とも思わない」というのは、あまりにも横笛を突き放し、薄情過ぎるが、贈歌に対する反論・反駁として理解されたのだろうと思う。ただ、この二首は贈答歌の体裁をとっているが、勅撰集や家集における、正統な贈答歌ではないように思う。それは、「うらむ」主体が対応していないからである。

そもそもこの贈答歌は、前出の古歌を用いた贈答歌のように、それぞれの思いを詠じただけで、贈答歌を詠むという意識はないと思われる。それだけに現実的で、強い自己主張が見られる

のである。その観点に立つと、滝口の和歌は、横笛の「剃るまでは浦見し物を」という、自分を恨んでいたということに反応し、自己弁護に終始した内容ではないかと思う。「そもそもなにかうらみむ」とは、私滝口が出家したとしても、あなたに恨まれる筋合いはないという意味ではないだろうか。

滝口は出家に際して、事前に横笛には何も語ってはいなかった。そのことに負い目を感じていたと思う。一方、横笛は、滝口の訪問が途絶えた時は、「絶えぬる夜半を恨みて、『何なる淵川にも身を投げばや』」と思い、往生院に辿り着いた時は、滝口に向って、「今まで御出家を知らせさせ給はぬ事の心憂さよ。如何なる時、虎臥す野辺へも、蓬が袖までも、おくれじと契り給ひしぞかし。いつの間に替りける御心ぞや」と、幾末までもと誓った言葉は、いつ心変りしたのかと詰る。こうした横笛の歎き詰問に応えたのが、滝口の返歌であった。

横笛から恨んでいたと言われ、「そるとても」、あなたに黙って出家したからと、どうしてあなたが私を恨むのでしょうか。「引き留むべき心ならねば」、私の出家への決意はあなたであっても引き留めることができないのだから。という、滝口の出家への弁明であり、出家への強い意志の表明と言えないだろうか。この強い意志があればこそ、横笛にも誰にも出家への思いを語らなかつたのである。語れば反対されるが、反対されたからといって心変わりすることはない強い意志なのである。だから、

伝えなかつた。伝えることは無駄なのである。こうした、出家を伝えなかつた意図もこの和歌から理解される。

このように読む時、二人の和歌は贈答歌のように見えるが、勅撰集や家集に見えるような遊戯性ある贈答歌ではない。横笛は、頑迷に対面を拒む滝口に対して当てつけに出家を試み、出家により、これからは滝口に悩まされることもなく、清々したとでも言うような主張である。一方、滝口は、自分が出家したからといって恨まれる筋合いのないとも言いたげな自己正当化的な内容である。芸術的・典型的贈答歌にはない、それぞれがそれぞれの思いを述べた、関係性の乏しい贈答歌となっている。しかし、それぞれの主張の強さは、事実を反映した現実的な歌のやりとりのように思われる。

また、横笛は、自ら切つた髪を滝口の「庵室の窓に投げ懸く」とある。手が届かなかつたので、わざわざ投げたのである。投げつけたのではないが、出家の証拠を是が非でも残すという点に、強気さ勝気さ我が強さが窺える。これについて、服部幸造氏は「髪を切つたのは恨みの心からであり、いささか惑乱乱気味の行為」⁶⁾、小林美和氏は、「それまで繰り返し綴られてきた、滝口に対する『恨み』の感情の爆発であつたはずの、切髪という行為が、ほぼ同時に現世離脱の悦びに反転する(中略)自らの髪を切り、それを庵室の窓へ投げ掛けるという横笛の行為は、滝口への決別宣言であると同時に、自らの罪深き執心への縁切

り状であつた⁽⁷⁾、名波弘彰氏は「髪を時頼入道に捧げることで、男に身も心もゆだねたのだ。いまは出世間という異世界に入りこんだ男に、制度として入りこめぬ女人はせめてのこととして、みずからの魂を憑かせることで永遠の愛の成就を祈った」(前掲論文)、小野美典氏は「瀧口に対する面当てに近いもの⁽⁸⁾」、栃本綾氏は「衝動的な女性⁽⁹⁾」と考えられる。

出家後、横笛は滝口の「誰故にかかる道にも思ひ入るぞとよ」の言葉が胸に突き刺さり、「如何なる男なれば、吾故にかかる道にも思ひ入るぞ。いかなる女なれば、浮世にながらへ、心に物を思ふらむ」と苦悩し、

恋しなば世のはかなさに云ひなして無き跡までも人に知らすな

と詠んで、「此川に身を投げて失せにけり」と入水する。自分が原因で出家する滝口とはどういう男なのか、また、自分は滝口を出家させておきながら、俗世に生きながらえ、滝口への思いに苦しんでいると煩悶している。出家しておきながら、仏道修行に専心できないでいる。しかし、そのことを悩んでいるようには見えない。仏者となって手の届かない存在となった滝口を恋しく思う気持ちに耐えられないと告白している。理性的でありながらも一途に滝口を愛する情熱的な女性であると言える。

叶わぬ恋故、入水した。入水直前に詠んだ和歌から分かるように、恋死である。しかし、恋死には言わないで、この世をはかなんで死んだというようにして、死んだことを滝口には伝えないで欲しいと詠じる。「誠の道にいるぞうれしき」と詠みながら、出家者らしい人生を送っていなかったことを滝口に知られたくないという思いが切である。滝口には、自分の弱さを知られたくなかった。滝口同様、仏道修行に邁進していると思っただけであったのであろう。また、自分の死を滝口が知ることにより、滝口が動揺し、修行の妨げとなることを恐れたのであろう。滝口の前で髪を切り出家して見せるといふ勝気さがあり、ブライドの高さはあるが、しおらしい女性であつたと言える。

二

次に「覚一本」を見る。出家の理由を、「延慶本」のように「女故」とはしていない。滝口は、父に横笛との結婚を反対されたことで、出家を決意する。

「夢まぼろしの世の中に、みにくき者をかた時も見て何かせん。思はしき者を見むとすれば、父の命にそむくに似たり。是善知識也。しかし、うき世を厭ひ、まことの道に入りなん」

出家への動機は、「延慶本」と同じであるが、出家への経緯は簡潔に語られる。父の反対を善知識と捉えて、出家への行動は早く、迷いが無い。対して、「延慶本」は、出家を決意した後、主家の小松家へ最後の出仕をし、横笛とも最後の逢瀬を持つ。

この世を去るにあたって、名残を惜しむ行動が綴られる。「延慶本」は人間的心情に寄り添う表現がなされ、「覚一本」は、細かな心情面は描かず、迷いのない強い精神性を持つ人物として描く。

横笛は、滝口が「嵯峨の往生院におこなひすましてぞゐたりける」ことを伝え聞いて、

「われをこそすてめ、様をさへかへけむ事のうらめしさよ。たとひ世をばそむくとも、なかかかくと知らせざらむ。人こそ心強くとも、たづねて恨みむ」

と、滝口の出家を聞いた時の心情を丁寧に表現している。「われをこそすてめ」と、横笛は滝口に捨てられたと思っている。そして、滝口の出家を恨めしいと言う。出家の理由も分らず、恨めしいというのは、相談もなく、自分勝手に出家したことが恨めしいというのであろう。なぜ、出家のことを伝えてくれなかったのかと責めるのである。滝口が出家を一人で決めたという強い思いがあったとしても、相談さえなかった恨みを伝えよ

うと嵯峨を訪ねる。「延慶本」では「横笛此事を聞きて、泣く泣く彼こへ尋ね行き」とある。滝口の所在が判明した喜びで、胸が一杯となり感激の涙を流しつつ一目散に駆け出した風である。

「覚一本」の横笛は冷静であり、「延慶本」の横笛は理性を失くすほど感激している。行方知れずであった最愛の滝口の所在が分かったのだから、「延慶本」の方が、現実の人間の行動に近く、生々しく、緊迫感がある。「覚一本」の心中描写は、「延慶本」では、嵯峨に赴いた時、滝口に対して語られるのであるが、「覚一本」では、読者の知りたい、読者の共感する内容として、いち早く表現したと言える。

「覚一本」は、「往生院とは聞きたれども、さだかにいづれの坊とも知らざれば、ここにやすらひかしこにたたずみ」というように、滝口の正確な所在を知らないまま彷徨う。「延慶本」は迷うことなくたどり着く。その道行はともにあわれに描写されているが、「覚一本」はよりあわれである。そこに現実を超えた文学的創作が見られる。「覚一本」が滝口の坊を知るのは、滝口の念誦の声によってであった。出家時の「『うき世を厭ひ、まことの道に入りなん』とて、十九のとしもとどろきッて、嵯峨の往生院におこなひすましてぞゐたりける」という通りの信仰生活であった。

一方、「延慶本」は、滝口が修行の辛さに堪えかね、その心境に重なる古歌をふと口ずさんだのを、横笛が偶然聞いたことに

よってその所在を知ったのであった。ともに、偶然の出来事であったが、「覚一本」の滝口は、理想化されたと言ってもよいような、隙のない修行僧であって、横笛の対面の要求を一切妥協なく拒否した姿勢に繋がる一貫した強い信仰心を示している。

横笛の訪問後は、住まいをも変えるという慎重さ徹底ぶりである。「延慶本」は、強い道心者として描かれているが、「覚一本」に比べ人間的とも言える、心の弱さを持った人物として造型されている。現実味のある、弱さも強さも持った人物なのである。

問題としている贈答歌は次の場面である、願った対面も叶わず、横笛は傷心のまま帰り、その後、出家する。「横笛も様をかへたる」と記すだけで、その心境や経緯は一切記されていない。「覚一本」作者は「延慶本」における横笛の、感情的・衝動的な行動を嫌った。これ見よがしに出家の証拠としての髪の毛を残すことはしない。誰にも告げず秘かに出家するのである。気性の激しい女性ではなく、慎ましい健気な忍従の人として描くのである。そんな横笛が自ら出家したことを歌に詠み、滝口に伝えることはない。それが、「延慶本」において、横笛の詠んだ和歌が、「覚一本」では、滝口が詠じたことになった理由である。次のように贈答されている。

横笛も様をかへたるよし聞えしかば、滝口入道一首の歌を送りけり。

そのまではうらみしかどもあづさ弓まことの道にいるぞうれしき

横笛が返ことには、

そるとてもなにかうらみむあづさ弓ひきとどむべきこころならねば

贈歌について、佐々木八郎氏、富倉徳次郎氏、梶原正昭氏・山下宏明氏、小野美典氏も同様の解釈をされている。⁽¹⁰⁾ 佐々木八郎氏は、「私は出家するまでは、ままならぬこのうき世を恨みもしましたが、今やあなたもご出家されたと聞き、ともに仏道に精進できるようになったことをうれしく思います」と解釈される。市古貞次氏は、「あなたが尼になるまでは私のことを恨んでいたが、そのあなたも仏道に入ったと聞いてうれしい⁽¹¹⁾」と解釈される。

横笛の出家を喜ぶという下句の解釈は同じだが、上句の解釈に違いがある。出家するまでは恨んでいたというのは、滝口、横笛共に当てはまる⁽¹²⁾ことが解釈が分かれる原因である。市古貞次氏は、横笛が出家したことを聞き、自らの出家時の心境を語り、今の充実した修行生活を述べ、横笛もそうなることを喜んでいるのである。そして、横笛も出家するまでは私を恨んでいたでしょうと理解されたのである。

返歌については、解釈は分かれる⁽¹²⁾。

①私は頭を剃っても、何を恨めしく思いましようか。今はもう引きとめることのできる心ではありませんもの。

(佐々木八郎氏前掲書)

②あなたが出家なさってもどうしてお恨み申しましようか。とてもお引きとめすることのできるお心ではないのですから。それゆえに私もこうしてあなたにならうて出家

したのです。(富倉徳次郎氏。梶原正昭氏・山下宏明氏、

小野美典氏同様)

③尼になったといつても何であなたを恨みましよう。とても引きとめることのできるようなあなたの決心ではないのですから。(市古貞次氏前掲書)

滝口・横笛二人とも、出家しているので、誰が剃るのか、また、誰が何を恨むのかについて、解釈は錯綜する。それだけにそれぞれの観点から解釈をされている。本来は、滝口の詠であつたものを横笛の詠とするのであるから、意味上に破綻が生じても不思議ではないが、そうではないだけに、一つの解を得ることに困難を覚える。

そこで、詠作者を交替させるといふ大胆な試みを行った理由を考えると、一つは、「覚一本」の理解では、横笛の性格上の面から、怒りにかられた衝動的な出家はすることはなく、自ら出家の詠を詠みかけることはしないということを先ほど述べた。

今一つは、「延慶本」では、贈答歌のように見えるが、実質は、返歌は贈歌に対する反論・反駁・切り返し等はなく、滝口は何も告げずに出家したことへの自己弁護に終始する内容であつた。それを、「覚一本」では、文学的な贈答歌にするべく試みられた、詠作者の交替ではなかつたかという観点に立つて、贈答歌を考えたと思う。

贈歌の「そるまでは恨みしかども」には、二人とも出家しているもので、二つの解釈が可能である。一つは、「私滝口は出家するまでは、横笛と結婚出来ない、思うにならないこの世を恨んでいたが」の意味である。ただし、このように解すると、横笛の返歌「そるともなにかうらみむ」は、「そるとも」は、滝口が出家したからといつての意となるが、「なにかうらみむ」は、どうして私横笛があなたを恨むことがありますかという意となる。これでは、贈歌の「恨む」主体は、滝口なのに、返歌では、横笛となるといふズレが生じ、贈答歌として対応関係はない。今一つを考える。「覚一本」作者は、贈答歌の形式を有するよう、作為したのだとすると、次の様に解するべきだと思われる。贈歌の「そるまではうらみしかども」は、あなた横笛が出家するまでは、私滝口のことを恨んでいたでしょうがという意であり、返歌は、私横笛が出家したといつて、そしてその原因があなたにあつたとして、それがどうしてあなたを恨むことになりましたかという意である。贈歌の主張を否定している。

そっけない、突き放したような内容である。諦めの思いも見えない。下句の「ひきとどむべきころならねば」は、恨んでいないことの理由説明である。「あなたの出家を留めようと説得しても、出家を思い留まってくれるようなあなたのお心ではないのですから」ということであり、滝口の一徹さ・頑固さを知っているから、諦めており、恨むことはないという意になる。こう解釈することによって、二首の和歌は、形式・内実ともに贈答歌に相応しいものとなる。市古貞次氏の解釈は、他の先行の考えと違っており、一読では理解しがたい点もあるように思うが、贈答歌という観点に立つと首肯出来る解釈である。

三

「横笛」において、「延慶本」と「覚一本」との間で、横笛・滝口の詠作者が入れ替わっている。「横笛」においては、「延慶本」に古態性を認めるとすると、これは、「覚一本」作者による、大胆な改変と考えられる。それは歌の内容を鑑みて詠作者を入れ替えたということではない。「覚一本」の横笛像は、控え目で慎ましく耐え忍ぶ女性である。「延慶本」では、横笛は、思い悩んで突如入水するが、「覚一本」では、滝口への思慕の念に堪えかねて恋死する。ここに、横笛像に対する、「延慶本」と「覚一本」との違いは明らかである。「覚一本」横笛像においては、

「延慶本」のように、滝口との対面の懇願が叶えられなかったとあって、その場で衝動的に、出家し、歌を滝口にこれ見よがしに送ることはしないのである。「延慶本」で横笛が詠んだ、出家を喜ぶ歌が、滝口の心境に通じるものであり、「覚一本」において、滝口詠とされたのであった。それは、二人とも出家し、恨みを抱いているという共通点があったことが、この交換を可能にしたといえる。加えて、「延慶本」では、二人の贈答歌は、和歌の贈答歌としての決まりに合致せず、返歌の滝口詠は自分の思い、自己弁護に終始している。それを文芸性が高いと言われる「覚一本」では、詠作者を入れ替えることによって、贈答歌の決まりの一つ、贈歌への反論という返歌が成立したのであった。「覚一本」作者は、「延慶本」の横笛像を嫌って、横笛歌を滝口歌と改変したことで、贈歌、返歌ともに一樣でない解釈をもたらししたが、文芸的贈答歌として解釈することを可能としたのである。和歌の解釈は多様であっていい。ただ、問題とした「覚一本」贈答歌は、「覚一本」が描く横笛像、二人の贈答歌を文学的贈答歌にするという観点に立つと、市古貞次氏の解釈が妥当であるという結論に至った。

註

(1) 神野藤昭夫氏「横笛草子の成立まで―室町時代物語論のため―」(『日本文学』26・日本文学協会・一九七七年二月)

(2) 佐伯真一氏「延慶本『平家物語』独自記事の位置―文覚・横笛・

維盛記事を中心に―(「かがみ」四七号・大東急記念文庫・平成二九年刊)に詳しい。

(3) 『伊勢物語』二四段は、宮仕えのために都に行った夫を三年間待ったが、それ以上待てなかった女に対して、厳しい結末であった。女性への厳しい視線という一つの流れがあるのかもしれない。

(4) 名波弘彰氏「延慶本平家物語の横笛説話における出家と入水をめぐる―横笛説話形成過程論序説―」(森野宗明退官記念「言語・文学・国語教育」三省堂・一九九四年刊)

(5) 山下宏明氏「平家物語の悲恋」(久保朝孝氏編「悲恋の古典文学」第八章 世界思想社・一九九七年刊) 一七二頁。

(6) 服部幸造氏「平家物語」瀧口出家譚」(松村博司先生喜寿記念国語国文学論集」右文書院・昭和六一年刊)

(7) 小林美和氏「滝口発心譚―延慶本平家物語の(特異)な手法をめぐる―」(『青須我波良』四五号・平成五年刊)

(8) 小野美典氏「平家物語『横笛』の巻の和歌―延慶本と覚一本の物語世界を求めて―」(『山口国文』第十九号・一九九六年刊)

(9) 栃本綾氏「平家物語」諸本における横笛の人物像」(『同志社国文』第七五巻・二〇一一年刊)

(10) 佐々木八郎氏著『平家物語評講下』(明治書院・昭和 三八年刊) 一二七〇頁。富倉徳次郎氏は「私は出家するまでは憂き世を恨みもしましたが、あなたが仏道に入ったというのを聞いて、まことにうれしく思っています」と解釈された。(『平家物語全注釈下巻(一)』角川書店・昭和四二年刊・三〇一頁)。梶原正昭氏・山下宏明氏は「わたしは、髪を剃り出家するまではこの世を恨みもしましたが、あなたも仏道に入られたと聞いて嬉しく思っています」と解釈された。(『新日本古典文学大系『平家物語下』岩波書店・一九九三年刊) 二二七頁。小野美典氏は「私瀧口は、髪を剃って出家するまでは、この世を悲しく思っていました、こうして(私が)仏門に入ったことを(今では)嬉しく思っています」と解釈された。

(前掲論文)

(11) 市古貞次氏校注・訳『平家物語2』新編日本古典文学全集(小学館・一九九四年刊) 二九八頁。

(12) 梶原正昭氏・山下宏明氏は、「髪を剃ってあなたが出家されたといつて、どうしてお恨みしましょうか。とても引きとどめられるあなたのお気持ではないのですから。それゆえ私もこうしてあなたにならって出家したのです」(前掲書)、小野美典氏は、「あなたが出家なさっても、私は何も恨んでいません。あなたのお心は私に引きとどめられるものではありませんから」(前掲論文)と解釈された。

〔付記〕テキストとして、「延慶本」は『延慶本平家物語全注釈』(汲古書院・平成二八年刊)「釈文」を、「覚一本」は市古貞次氏校注・訳『平家物語』新編日本古典文学全集(小学館・一九九四年刊)を用いた。